

なきごえ



1981

5

大阪市
天王寺動物園協会

動物と私

愛鳥週間の今昔

藤原 廣 蔵



鳥についての正しい知識を広め、野鳥を愛護する心を一般に養うために愛鳥週間が行われて30数年になります。最初は4月10日をバード・デーとして昭和22年に東京で行われました。

それはGHQの勸奨により、同年に結成された日本鳥類保護連盟が主催したもので今日に及んでいます。大阪での初めてのバード・デーの催しは翌年、昭和23年4月10日に淀川べりの聖徳館で行われました。プログラムは講演（川村多実二先生の鳥の話）、レコード放送（川村先生秘蔵の英国の鳥の声、当時まだ国産はありません）、映画（富士山麓の鳥）、小・中学生を対象の歌唱指導（小鳥の歌、楽譜配布）等で、実際の主催は日本野鳥の会大阪支部がやり、予期以上の大盛会でした。翌年には大阪府の予算が付き、パンフレットと宣伝カーを提供してもらって、野鳥の会員が1日中、市内を巡回しました。昭和25年から5月10日をバード・デーとし、5月10日から16日までの1週間をバード・ウィークと改め今日に至っています。

初めの頃は愛鳥週間の主旨が徹底しなかったり誤解されたりで、新聞の取り上げ方もメジロの鳴合せ会とか、カラスを飼い慣らしてペットに仕立てている人の記事を大きく取り扱うなど何かと見当違いが絶えなかったが、その後、年輪も重ねて最近では自然保護の一環としての愛鳥思想が漸く行き渡った感じです。毎年の愛鳥週間のポスターも今日ではなじみ深い行事となりました。その他の定着した行事としてはパンフレットによるPR、講演会、スライドと映画の会、生態写真と解説パネル展、週間中の探

鳥会等、各地それぞれに趣向をこらして行われます。動物園も時には展示場として利用させて頂きました。

日本野鳥の会では、機関誌「野鳥」を通じて全国から募集したカラー写真約1,500点より100点を選び、これを中心に第1回日本野鳥の会バード・ウィーク展を昭和51年に東京ソニービルで開催しました。翌年は第2回として全国5ヶ所（東京・仙台・横浜・大阪・福岡）各支部主催で、この写真約80点と他に各会場独自の展示や催しを併用して行い、これを機会にこの写真を各支部にストックして、随時他の団体にも貸与しています。

日本野鳥の会では全国にわたる支部は本年4月現在で62を数え、愛鳥週間中の日曜日を全国一斉探鳥会の日として気分を盛り上げることにしています。愛鳥思想も行事も一応定着した現在では、野鳥人口を増やす上で探鳥会こそが最も効果のある行事ではないかと考えています。昨年5月11日の箕面公園探鳥会では参加者100人を超える盛況でした。本年5月10日には箕面と南港の2ヶ所で探鳥会を催すことになりました。

日本野鳥の会が北海道のウトナイ湖に建設中のサンクチュアリがいよいよ完成し、5月10日にオープンの予定です。サンクチュアリとは「野鳥の聖域」という意味で、そこでは野鳥が自然の環境と共に保護され、訪れる人達は観察小屋や林の中を抜ける自然観察路などから自然のままの野鳥の姿を真近に楽しむことが出来ます。野鳥の会では今年の愛鳥週間の目玉として将来の運営に期待しています。私達としては将来、全国各地にサンクチュアリが出来て、誰でも気軽に野鳥の自然の姿を楽しめるようになればと願っています。既に第2号ともいうべきものが福島市の五本松地区で計画され、本年度から5年計画で具体化されることになりました。バード・ウィーク30年の成果とひそかに考えています。

（日本野鳥の会大阪支部長）

なきごえ5月号もくじ

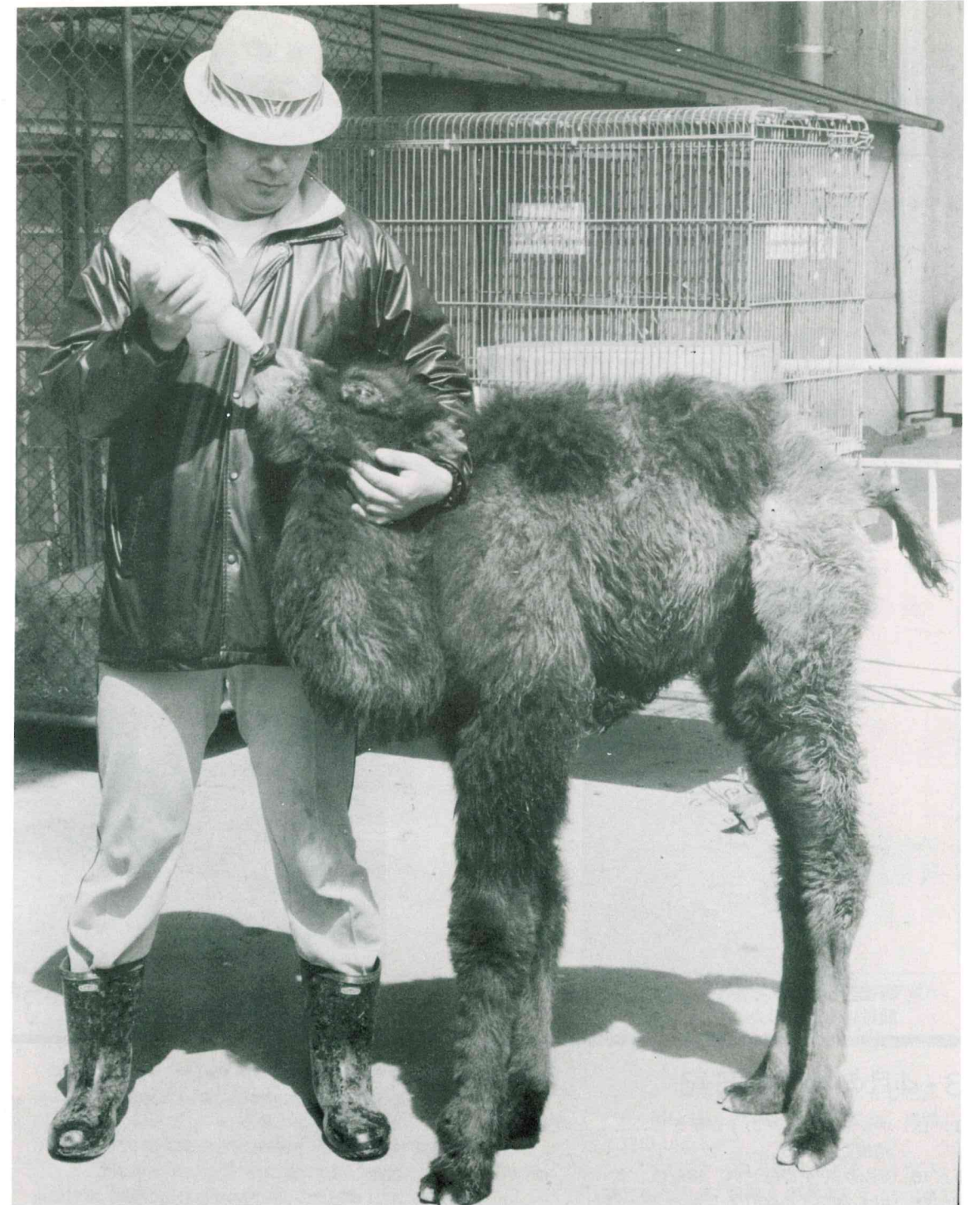
動物と私	2
フタコブラクダの人工哺育	3
動物園グラフ・動物園日記	4・5
大阪の野鳥	6・7
保護された野鳥	8・9
キーパーズ・アイ	10
動物園ニュース	11

表紙の写真説明

“オオヤマネコ”

ヨーロッパ、アジア北部、北アメリカに分布する大形のヤマネコで、耳の先には黒いふき毛があるのが特徴です。

（撮影：農本 武志）



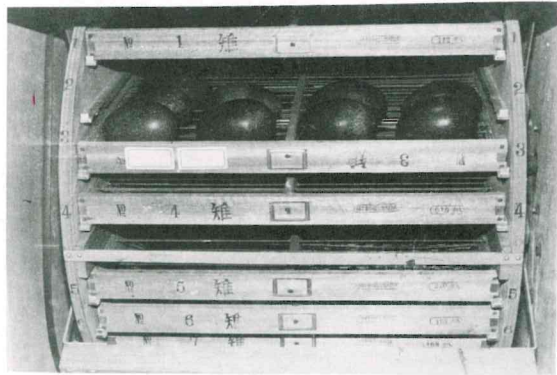
“フタコブラクダの人工哺育”

3月5日に生まれたフタコブラクダの赤ちゃん（メス：モモコ）は人工哺育で順調に育っています。生後3日間は自力で立つこともおぼつかなかったのですが、哺乳量も日ごとに増加し、みちがえるほど元気になりました。

（撮影：榊原 安昭）

動物園グラフ

「エミューのヒナの成長記録」



孵卵器に入れられたエミューの卵



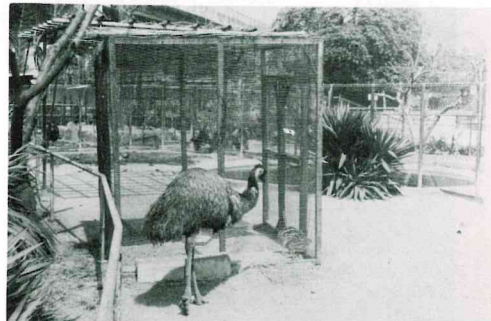
孵化翌日から、ピンセットで餌をつまんで餌付けをしました。

1978年に来園したエミューが、昨年12月20日に初めて産卵し、その後2月6日までに13卵を産卵しました。そのうち8羽が孵化し、6羽が成育しています。かわいいヒナの成長経過をご覧ください。

撮影：榊原 安昭



孵化後、しばらくは赤外線ランプとパネルヒーターで保温しました。



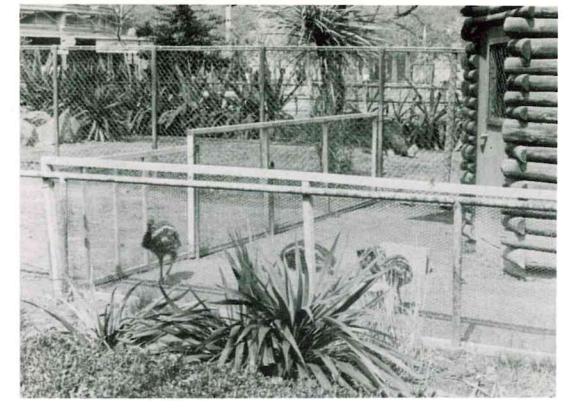
孵化後、5日目頃からは昼間のみエミュー舎の中に造った小屋で日光浴しました。



水を飲むヒナたち。



元気に育つヒナたち。



孵化後、10日目頃からエミュー舎の一角をしきって運動させました。

エミューの孵化状況

No	産卵日	孵化日	孵化日数	備考
1	1980.12.20	1981.2.15	54	
2	23	15	54	1981.4.13 死亡
3	27	17	52	
4	29	22	55	
5	1981.1.1	22	52	
6	8	無精	—	
7	13	無精	—	
8	15	3.12	56	
9	18	無精	—	
10	22	無精	—	
11	26	3.21	54	1981.3.22 死亡
12	2.2	無精	—	
13	6	4.4	57	

★孵卵器への入卵日と産卵日は必ずしも一致しません。

3・4月の動物園日記

- 3/15. ブラックバックの子が足を痛めましたので治療しました。
- 3/16. サンケイが寄贈され、検疫後、さっそく展示することになりました。
- 3/17. 人工哺育中のフタコブラクダの子が下痢をしたので、薬を与えました。
- 3/19. オオヤマネコの雄が検疫を終え、本日より展示されることになりました。アシカの子を離乳させるため、別の小さな餌付け用池へ移動させました。
- 3/21. エミューの第7卵目がふ化しました。ホンドキツネが小獣舎から移動して中獣舎で展示されることになりました。

- 3/22. きノウフ化したばかりのエミューが、先にふ化し体も相当大きくなった兄弟たちにふまれ死亡しました。
- 3/23. モモイロヘラサギが右の翼を骨折したので治療しました。
- 3/24. ドリルとマンドリルの子計2頭が、本日より、サルアパートでドリルと見合いすることになりました。佐世保市亜熱帯動植物園よりやってきたオセロットの雄レオが、当園のオセロットの雌パトラと見合いすることになりました。
- 3/25. インドタテガミヤマアラシの雄が衰弱死しました。
- 3/26. フタコブラクダの子が元気に育っています。
- 3/27. 離乳中のアシカの子が、えさを全く食べま

せん。

- 3/28. アシカの子の離乳を一旦あきらめて、元のアシカプールへ戻すことにしました。
- 3/31. アシカの子を再び隔離して、今度は強制的に魚とミルクを与えることにしました。
- 4/1. コウノトリ舎が完成したので、ツル舎よりコウノトリのつがいを引越させました。ドリルと見合いしていたドリルとマンドリルの子2頭を同居させることにしました。2頭はおとなのドリルを見て、ややオドオドしている感じで、ドリルに近づこうとはしませんでした。
- 4/2. オセロットの雄と雌の見合いが終わり、本日より同居することになりました。
- 4/3. 南園の池にいるコブハクチョウが産卵しま

した。

- 4/4. エミューの第8卵目が、ふ化しました。
- 4/5. バーバリーシープのおばあさんが、衰弱して死亡しました。
- 4/6. フタコブラクダの子が体重もぐっと増え、離乳期に入り、牧草を食べるようになりました。
- 4/7. キジ類の卵のふ卵器内への入卵を開始しました。この日は、ミカドキジ4卵の入卵です。
- 4/8. アミメニシキヘビが1頭緊急保護されました。
- 4/9. ムササビの子2頭が保護されました。
- 4/14. オランウータンの雄ブルが雌オランの左腰を咬んだので、負傷したオランをすぐ治療しました。

大阪の野鳥

上田 恵介

大阪府下にはどれぐらいの種類の鳥たちが住んでいるのだろうか。1973年に大阪府が日本野鳥の会大阪支部に委託してまとめた大阪府の鳥類目録では、1945年以降（戦後）に記録された鳥は 270種、実に日本産鳥類の半分となっている。

(表) 大阪で記録された鳥
 (「大阪の野鳥」、大阪府、1973年より)

	通常生息種	稀な記録種	計
留鳥	43種	6種	49種
夏鳥	27種	3種	30種
冬鳥	66種	29種	95種
旅鳥	39種	29種	68種
迷鳥	2種	26種	28種
計	177種	93種	270種
(うち繁殖種)	(71種)	(6種)	(77種)

目録をまとめた真下氏によると、この 270種のうち、稀に渡来するにすぎないものや、生息数のきわめて少ないもの93種を除いた 177種が府下に普通に生息しているという。また、繁殖する鳥は77種である。

1974年からは大阪府下40地点を定点に、夏3回、冬3回の調査がおこなわれ、それによると、1978年までの5年間で 157種の鳥が記録されている。



ヒヨドリ

これらの結果を総合すると府下で1年を通じて普通に見られる鳥は150~170種ぐらいのものであろう。この中には夏だけをまたは冬だけを大阪ですごす鳥たちもいれば、1年中ずっと大阪で生活をつづける鳥もいる。以下、表に沿って、どこで、いつ、どんな鳥が生活しているのか述べてみよう。

〈夏鳥〉 寒い冬を南の地ですごし、春になると渡ってくる鳥たちである。水辺にはヨシゴイ、バン、オオヨシキリなどがやってくるし、南港の埋め立て地などにはコアジサシやコチドリが

やってきて繁殖する。山地にはサンショウクイやヤブサメ、オオルリ、サンコウチョウなど、声や姿の美しい鳥たちがくる。特に府下最高峰の金剛山ではコリリやクロツグミ、ジュウイチ、ツツドリなど府下の他の山には生息しない鳥をみることができる。

私たちに最もなじみ深いツバメも、もちろん夏鳥であるが、もう一種、腰の赤いコシアカツバメもそうである。コシアカツバメは府下では箕面、河内長野などに限ってみられる。おそらくツバメと何らかの要因ですみわけているのだろう。

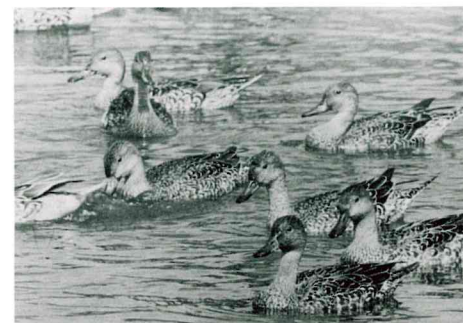
夏鳥の中でもバンやセッカなど冬期に少数が残って越冬するものもある。

〈冬鳥〉 夏鳥と反対に冬になるとシベリアなどから日本へやってくる鳥たちである。オオハクチョウは有名であるが、府下での記録はごく稀で、今冬、長居公園内の池と鶴見緑地にあらわれた群が府下2度目の記録である。



カルガモ

カモ類、カモメ類、ツグミなどの小鳥類で冬鳥は沢山いる。この5年間で記録されたカモ類は16種ある。淀川下流の中津附近の水面がこれらカモたちのたまり場となっている。



オナガガモ

ユリカモメ、セグロカモメ、カモメなどは冬のポピュラーなカモメ類である。ノスリやチョウゲンボウなどのタカ類やコミミズクというフクロウの一種も越冬組である。ツグミ、シロハラ、ジョウビタキ、

ルリビタキなどのツグミ類やアトリ、マヒワ、ベニマシコ、ウソ、シメなどのヒワ類にも冬鳥は多い。これらの多くは本州中部以北では夏鳥として繁殖している。



コミミズク

〈留鳥〉 1年中、ほぼ同じ地域にとどまって生活する鳥たちでスズメ、ムクドリ、モズ、カラス類など、私たちになじみ深い鳥がいる。どういうわけか留鳥の多くは深い山ではなく、私たちの身近にすんでいる。夕方、「グァツ グァツ」となきつつ空をとんでいく「夜ガラス」の別名をもつゴイサギ。竹ヤブで「チョットコイ、チョットコイ」となくゴジュケイ。コバルト色をきらめかせて池から小川へ、田んぼへとびまわるカワセミ。その生活史を府下で完了する鳥たちである。

ホオジロやカララヒワなど、冬期にかなり数がふえる鳥では北方の個体群の流入が知られている。



キジバト

〈旅鳥〉 春と秋の2回、日本を通過する鳥たちである。シギ、チドリ類が旅鳥としてよく知られている。大阪南港の埋め立て地や、淀川、大和川の河口や中洲がこれらの渡来場所になる。約20種ぐらいがポピュラーな種である。エゾビタキ、マミジロ、アカハラ、アカモズ、メボソなど、主として信州より北で繁殖する鳥たちも大阪では旅鳥の部類に入る。4、5月または9、10月に大阪市内でも通過途中のこれらの鳥に出会うことがある。



チュウシャクシギ

〈迷鳥〉 本来の生息地や渡りのコースからはずれてやってくる鳥たちである。クロトキヤツメナガセキレイ、また、台風通過のあとの南港で拾われたアカオネツタイチョウなどがそうである。

大阪の野鳥はもうすぐ 300種になるだろう。しかし、たった 1,800km²の面積しかない大阪府で、しかも大阪平野をとりまく3つの山系（北摂、生駒・金剛、和泉）には、開発の手がどんだんのびてきている。平野部の農耕地も次々と宅地化され、数多くあったタメ池も姿を消しつつある。海岸線に目をうつせば泉南の一部をのぞいてすべてコンクリートの護岸で、自然の海浜はみあたらない。大阪の鳥たちは、こんなすみにくいところでほそぼそと生きている。だから、いくら鳥の種類が 300種になったといっても手放しでよるこぶわけにはいかない。それをリストの上だけの過去の遺物にしてはならないと思う。

〈探鳥に出かけよう〉 最近、鳥をみてたのしみという趣味が、ようやく一般の人にも理解されはじめて、新聞、雑誌にもバード・ウォッチング、Birdingの言葉がはらんしている。バード・ウォッチングはナウいアウト・ドア・スポーツなのだそう。そして、そんな記事にはたいがいカッコイイ服装で録音機材などをもったおにいさんが登場する。けれど、鳥をみることはもっと気楽にできることである。

たとえば5月の公園に、1時間早起きしてでかけてみよう。ジョギングがでたらいい。双眼鏡があるにこしたことはないがなくてもいい。アカハラが囀っていたり、オオルリやキビタキが木立ちの間を、キラッと横切ったりする。そう、この季節の公園は旅鳥たちの休息場所になっているのである。

(日本野鳥の会大阪支部幹事)

保護された野鳥

昭和53年2月1日から今年4月13日までの間に、53種163羽の鳥とコジュケイの卵3個が当園で保護され動物病院に持ちこまれました。各鳥の羽数は表1にまとめてみました。保護された鳥163羽のうち幼鳥が78羽(48%)で、まだふ化してまもないヒナが10羽です。傷病で来たものも多く36羽(22%)を数えました。傷病のものは当然ですが、外見ではどこも悪いようなどころはみあたらず、健全そうに見える鳥でも、どこか変で、悪いところを持っているものがほとんどでした。傷病で一番多いのは翼の骨折で、約半数44%を占めています。鳥は哺乳類などに比べ格段に繊細で、家禽以外、つまり野鳥は治療のために手でつかんでいるだけで死んでしまうことがあります。ショック死してしまうのです。ですから、治療するときも、できるかぎり手早く行わなければなりません。骨折の場合は、整復固定をして、あとは骨の増生を待つばかり。人はじっとしていられますが、野鳥たちにそんなことを期待してもむりなことです。強いてじっとさせたとしても、それがストレスとなって死んでしまうのは目に見えています。それでも、うまく骨がくっつくときがありますが、



衰弱して飛べずにいるところを保護されたアオバズク

そんなとき我々獣医師陣は治療の甲斐があったと涙が出るほどうれしくなります。骨折が非常に治療しにくい原因として考えられることは、普通、鳥の骨は折れた骨の端が鋭角を形成す

るように折れて、複雑な骨折となりやすいこと。こうなると折れた骨がくっつくのに多くの日数を要するだけでなく、変にくっついてしまうことが多いので飛びにくくなります。また、骨折治療後は、骨折部分に余分な骨がついて、飛ぶ時の左右のバランスがくずれてしまうことがあります。また、治療中に翼の筋肉が萎縮してしまっていることもあると思われます。人でよく言われる治療後の機能回復のためのリハビリテーションを、野鳥の場合も考えるべきなのかも知れません。翼の骨折でも、関節部の骨折、骨端部の骨折になってくると飛べるようになるのは絶望としか言いようがありません。この場合、折れた部分から翼を切り取らなければならないのが大半を占めます。固定が非常にむずかしいからなのです。

幼鳥は78羽届けられたわけですが、とくに、まだふ化して間もないものは、えさを与える回数と保温で生存が決まるようで、スズメのヒナなどは1日か2日で死んでしまうものが大半です。ちなみに、幼鳥78羽のうち、保護されて10日のうちに死亡したものは36羽(46%)で、ほとんど半数を数えます。動物園につれてこられた時には、体温の冷えきっていたものもみられましたし、衰弱しきっていたものも



保護されて、これから骨折の治療をうけようとするゴイサギ

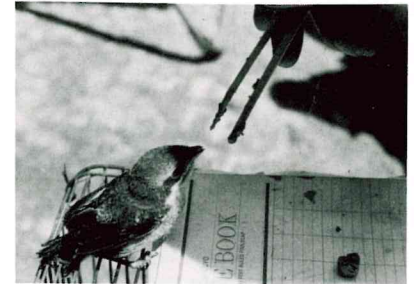
みられました。体温を上げるために保温し、えさはできる限り多くの回数を与えるようにしました。しかし、我々のこの努力にもかか

わらず、ヒナや幼鳥たちは死んでいってしまうのです。人工育雛はほんとうにむずかしい。これは私の実感です。でも中には以外と順調に育ってってくれる野鳥もいます。キジバトなどはその代表格といえるでしょう。ハト用の配合飼料を水にひたしておいて、それを日に3回ぐらい強制的に食べさせていれば大丈夫です。成鳥に近くなると自分1人で食べるようになってきます。カモ類のヒナも保温し、幼雛用の配合飼料にうまくなれて食べてくれさえすれば、病気にかからない限り、だいたいうまく育ってくれます。保護されたカルガモ5羽のうち、1羽だけがなぜか翌日に死んでしまいましたが、残り4羽は順調に育ち、今は南園の池で皆さんに元気な姿をお見せしています。魚食類の幼鳥では、ゴイサギ、アオサギ、カイツブリなどが保護されてきていますが、もうだいぶ大きかったせいか、ゴイサギ、アオサギはアジで、カイツブリはドジョウでよく餌付きました。特に、カイツブリは、水中生活が多いので水槽に入れるのですが、陸のかわりとなる部分を水槽につけること、水は毎日新しいものと換えることが大切です。一方、餌付きの悪い魚食の鳥がいます。それは、天然記念物として有名なオオミズナギドリで、魚のアジを自分では食べないので、鳥の口をむりやりやりあけて、のどの奥へ押し込むのですが、はじめのうちはアジを丸ごとはき出したりしてうまくいきませんが、そのうちだんだんはき出さなくなります。いままで約6ヶ月生きたのが最長でした。毎年11月、何羽かが保護されてきますので、健全なものは年を越させて、オオミズナギドリが渡来する初夏の頃に、繁殖地へ放つてやるのが私の目標です。

保護されてくる野鳥に季節的な変動があるかどうか見るために、表2に保護された羽数の多い季節と何らかの関係がありそうな野鳥のみをピックアップしてまとめました。

オオミズナギドリは、保護されるのが10、11月に限られています。これは、この鳥のヒナが10月下旬頃から11月上旬に日本を去っていくのと一致してい

るようです。繁殖地を飛び去ったものが早々、大阪近辺で脱落するようです。ユリカモメも、3月に2羽、4月に1羽と羽数は少ないですが、4月の初め頃に渡りをはじめますので、それと関係がありそうな気がします。アオバズクは全国に夏鳥として渡来しますが、4月に2羽保護されていますから4月にはもう日本にやって来ているようです。4月や5月に保護されたアオバズクは、渡りをしてヘトヘトに疲れきっていますから、いくら他のフクロウ類より警戒心の強いアオバズクとて力がつきては万事休す、外傷などない健全な鳥でも保護されるゆえんと思われま



さし餌してもらうモズのヒナ

ツバメ、スズメは4月～8月頃に繁殖期があるようで、巣から落ちたヒナあるいは幼鳥たちの保護がほとんど大半を占めています。ムクドリは5月～6月、ヒヨドリは6月～7月頃が繁殖期にあたるようです。ゴイサギは1月、6月、7月、10月にそれぞれ幼鳥の保護がありますが、ゴイサギの場合、成鳥の羽になるまでだいぶ期間がかかりますから、ヒナが見られる時期と繁殖期が必ずしも重なることはないようです。キジバトは一般に本州中部以南では、周年繁殖すると言われます。大阪で保護された幼鳥は5月から12月の間ですが、大阪でも一応、周年繁殖していると言えそうです。

きょうも野鳥が保護されて来るかも知れません。傷つき衰弱した野鳥を元気な体にしてやるため、巣から落ちたヒナたちがすくすく育ってくれるよう、野鳥保護の一担い手として、日々奮闘している私です。(飼育課獣医師：森本 委利)

表1 S.53.2.1 ~ S.56.4.13 の間に保護された野鳥 () 内は幼鳥数

種名	スズメ	ムクドリ	ツバメ	コジュケイ	カイツブリ	ヤマガタビ	オオミズナギドリ	アオバズク	ゴイサギ	キジバト	フクロウ	ワシタカ
種名	ツバメ	ムクドリ	スズメ	コジュケイ	カイツブリ	ヤマガタビ	オオミズナギドリ	アオバズク	ゴイサギ	キジバト	フクロウ	ワシタカ
羽数	12 (9)	12 (7)	8 (8)	6 (4)	4 (2)	2 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	4 (4)	7 (2)

種名	ガンカモ	コウノ	ツル	ハト	キジ	ミズナギ	ヨタカ	カイツ	アマツ	ペリカ	ホトギ	ブッポウ
種名	カオヨヒ	ゴアコ	クヒバ	キア	キコ	オオ	ヨ	カ	ア	ア	ホ	ヤ
羽数	5 (5)	1 (1)	1 (1)	1 (1)	3 (3)	3 (3)	6 (6)	2 (2)	2 (2)	1 (1)	1 (1)	1 (1)

表2 保護された野鳥の月別羽数 () 内は幼鳥数

種名	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
ツバメ				1	4 (3)	3 (2)	4 (4)	1 (1)				
スズメ					6 (4)	3 (3)	1 (1)	2 (2)				
ムクドリ					7 (7)	1 (1)						
ヒヨドリ			1			2 (2)			1			
ユリカモメ			2	1								
アオバズク				2	1			1				
ゴイサギ	1 (1)				1 (1)	1 (1)	3 (1)		3	5 (3)		1
キジバト	1		2		4 (2)	5 (3)		4 (4)	2	5 (5)	5 (5)	2 (2)
オオミズナギドリ											6	

① 163羽の鳥で、自然復帰させたものは14羽 (9%)
 ② 展示したものは 24羽 (15%)
 ③ コジュケイの卵3コのうち2個は有精卵であったが、残念ながら化までには至らなかった。

キーパーズ・アイ ⑰

“自由とは”



私が毎日小鳥の家で作業をしていると、必ずといっていい程、「兄ちゃん、とり逃げてんで！」と入園者の方からの知らせがあります。小鳥の家のフライ

ングケージに飼育されているカササギに会いに来た、野生？（注：先輩の話ではペットで飼われていたのが、逃げたもの）のカササギを見つけた入園者の方が、感ちがいをしてウザウザ知らせてくださるので。野生のカササギが、まるでフライングゲージの中の仲間のところに戻りたがっているように見えるので、心配のあまりの事と思うのですが、「あれは野生のカササギなんです」と言うと、「あんなに中に入りたがってんねんから、捕まえて中に入れたらええやんか」といわれます。しかし私は、一生オリにとじこめられたカササギの方が幸せか、大空を自由にとびまわれるカササギの方が幸せかと……考えると返事にこまってしまう。

オリの中のカササギには餌の心配もないし、外敵に狙われる事もなく安心して暮らせて幸せだろうと思うのですが、自由とは何かと考えると……。

（飼育課：西川 徹二）

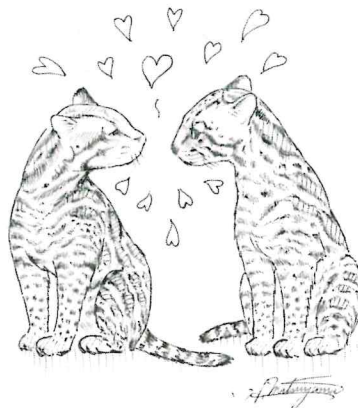
“良縁来たる！”

“ブリーディングローン”。この耳新しい言葉をみなさんをご存知ですか？このブリーディングローンは、稀少動物の繁殖を計るために、動物園間で雄あるいは雌の貸し出しをするというすばらしい試みです。アメリカの動物園では、さかんに行われていて、かなりの成功をおさめています。日本でも近年、京都動物園の雌のゴリラを、上野動物園に貸し出して繁殖を試みた例があります。

当園でも、貴重な動物が1頭で飼育されているケースがあります。これらの動物を繁殖させるため、このブリーディングローンで良縁を結ぼうと検討の結果、小獣舎で飼育している、オセロット（パトラ、雌8才）に、九州の佐世保市亜熱帯動植物園から、雄のオセロット（レオ、7才）を3年間貸していたく事になりました。ブリーディングローンによるカップル第1号の誕生です。到着し最初のお見合い

の時に、双方とも1人？暮しが長かったために、うまく仲良くなってくれるかと不安でしたが、担当者の心配をよそに、2頭はすぐにあうあうカップルとなりました。関係者一同ブリーディングローンの成果が、早くくる事を願っています。

（飼育課：農本 武志）



イラスト：松山 浩美

動物園ニュース

§ コウノトリ舎完成

昨年11月から建設をすすめていたコウノトリ舎が、いよいよ完成し、4月1日からオス、メス1番のコウノトリを展示することになりました。

場所は北園東側のファミリー広場で、面積は330㎡、高さは13mもある大きなフライングケージです。ケージ内には巣台も4ヶ所設置しており、金網も内張りにするなど、いくつかの工夫がされ、日本一の規模となりました。日本では絶滅が心配されているコウノトリですので、早く新しい環境に慣れ、ぜひⅡ世を誕生させてほしいものです。

広いケージに放されたコウノトリ夫婦は、最初のうちは少しとまどっていましたが、今では新居にも慣れ快適そうです。

§ 動物病院完成

昨年12月10日から行なわれていた動物病院の旧設部分の改装工事が4月30日に終了しました。今回完成した部分には入院収容室、解剖室、記録室などが作られ、昨年完成した増築部分を含めて延面積は241㎡になりました。新築工事から数えて2年にわたる工事でしたが、これで西日本一の規模となりました。

§ バーバリーシープ出産

バーバリーシープに出産シーズンが



ません。



§ 保護動物

毎年春になると多くの野鳥が保護されてきます。今年も3月中頃から、ユリカモメ2羽、キジバト、アオバト、ヒヨドリ、ヨシガモなどが保護されました。いずれも翼を骨折していて、残念ながら治療後も自然復帰はできないようです。

哺乳類もタヌキが2頭、ムササビの子が2頭保護

されています。ムササビの子供は4月8日に島根県で保護され、翌日動物園に届けられました。2頭ともまだ目も開いていない小さな子供で、体温も下っていたの



くらしを彩るショッピング



近鉄百貨店

アベノ店 (06) 624-1111・上本町店 (06) 779-1231
東京近鉄 (0422) 21-3331

・近鉄百貨店グループ

大阪(アベノ・上本町)・東大阪・奈良・京都・岐阜
枚方・四日市・和歌山・徳山・別府・東京(吉祥寺)

キーパーズ・アイ 17

“自由とは”



私が毎日小鳥の家で作業をしていると、必ずといっていい程、「兄ちゃん、とり逃げてんで！」と入園者の方からの知らせがあります。小鳥の家のフライ

ングケージに飼育されているカササギに会いに来た、野生？（注：先輩の話ではペットで飼われていたのが、逃げたもの）のカササギを見つけた入園者の方が、感ちがいをしてうざうざ知らせてくださるので。野生のカササギが、まるでフライングゲージの中の仲間のところに戻りたがっているように見えるので、心配のあまりの事と思うのですが、「あれは野生のカササギなんです」と言うと、「あんなに中に入りたがってんねんから、捕まえて中に入れたったらええやんか」といわれます。しかし私は、一生オリにとじこめられたカササギの方が幸せか、大空を自由にとびまわれるカササギの方が幸せか……考えると返事にこまってしまう。オリの中のカササギには餌の心配もないし、外敵に狙われる事もなく安心して暮らせて幸せだろうと思うのですが、自由とは何かと考えると……。

（飼育課：西川 徹 二）

動物園ニュース

§ コウノトリ舎完成

昨年11月から建設をすすめていたコウノトリ舎がいよいよ完成し、4月1日からオス、メス1番のコウノトリを展示することになりました。

場所は北園東側のファミリー広場で、面積は330㎡、高さは13mもある大きなフライングケージです。ケージ内には巣台も4ヶ所設置しており、金網も内張りにするなど、いくつかの工夫がされ、日本一の規模となりました。日本では絶滅が心配されているコウノトリですので、早く新しい環境に慣れ、ぜひⅡ世を誕生させてほしいものです。

広いケージに放されたコウノトリ夫婦は、最初のうちは少しとまどっていましたが、今では新居にも慣れ快適そうです。

§ 動物病院完成

昨年12月10日から行なわれていた動物病院の旧設部分の改装工事が4月30日に終了しました。今回完成した部分には入院収容室、解剖室、記録室などが作られ、昨年完成した増築部分を含めて延面積は241㎡になりました。新築工事から数えて2年にわたる工事でしたが、これで西日本一の規模となりました。

§ バーバリーシーブ出産

バーバリーシーブに出産シーズンがおとずれました。3月24日に2頭、3月25日にも2頭生まれました。残念ながらそれぞれ1頭死亡しましたが、残る2頭は元気に育って、かわいい岩山をかけまわっています。



§ 鳥類の産卵

エミューは、昨年12月から産卵を開始し、結局8羽が孵化し6羽が成育しています。また、キジ類は3月14日のハッカンを始めとして続々と産卵しています。4月に入ってコサンケイ、ウチワキジ、ベニジュケイなどの珍しいキジ類の産卵も始まりまし。また、一昨年オーストラリアのメルボルン動物園から来園したヤブツカツクリ（ヤブシチメンチョウ）も産卵しています。孵卵器で人工孵化を試みていますが、腐葉土で作った塚の中に卵を産み、その発酵熱で孵化させるという変わった習性の鳥ですので、孵卵器で孵化するかどうかわかりませんが、孵化すれば日本では初めてのことと思われまし。

水鳥では南園の日本庭園で、コブハクチョウが、4月4日から産卵を始め、現在5つの卵を抱えています。うまくゆけば、5月10日頃にはかわいいヒナをつれたコブハクチョウをご覧いただけるかもしれ

ません。



§ 保護動物

毎年春になると多くの野鳥が保護されてきます。今年も3月中頃から、ユリカモメ2羽、キジバト、アオバト、ヒヨドリ、ヨシガモなどが保護されてきました。いずれも翼を骨折して、残念ながら治療後も自然復帰はできないようです。

哺乳類もタヌキが2頭、ムササビの子が2頭保護

されています。ムササビの子供は4月8日に島根県で保護され、翌日動物園に届けられました。2頭ともまだ目も開いていない小さな子供で、体温も下がっていたので、早速哺育器に収容し、ミルクを与えました。残念ながら1頭は4月16日に死亡してしまいましたが、残る1頭は元気に育っています。



§ 春の動物園まつり

去る4月26日から5月5日まで「春の動物園まつり」が開催されました。期間中、動物の無料相談コーナー、幼稚園児の遊戯、紙しばいと人形劇、ラッキープレゼント、ボランティアによる動物クイズや入園者実態調査アンケートなどの催物が行われ、展示館では「動物園のポスター展」が開催されました。また、この期間中、「動物園クリーンキャンペーン」と銘うって動物園の美化運動を展開しました。

◎お知らせ

5月10日からの愛鳥週間にちなんで、北園展示館にて「野鳥展」を行ないます。期間は5月10日から31日までです。

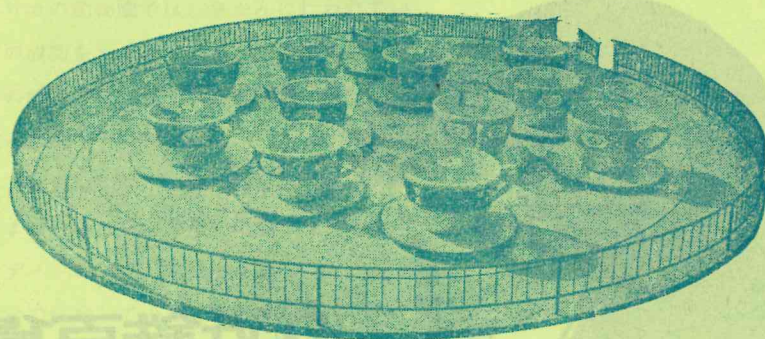
休園日のお知らせ

動物園の休園日は毎月第3月曜日です。8月までの休園日は下記のとおりです。

5月18日(月)、6月15日(月)、7月20日(月)、8月17日(月)。

開園時間は9時半～5時で、4時に切符売止めになります。

遊園施設委託経営・製作・販売



久竹 娯楽株式会社

本社工場 大阪市西区北堀江1丁目23番21号
電話 大阪(06)541-3112・3938 番

なきごえ 昭和56年5月15日発行(毎月1回15日発行)

編集/大阪市天王寺動物園

発行人/大阪市天王寺動物園協会 和田辰巳

印刷所/株式会社 松村善進堂 定価100円(送料共)

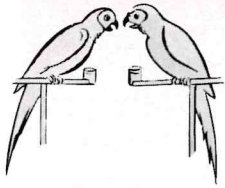
第17巻 第5号(通巻188号)

〒543 大阪市天王寺区茶白山町6-74

電話 大阪 (06)771-0201

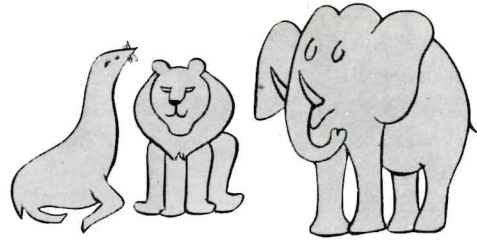
振替口座 大阪 37823

1年継続(12部)1,100円(送料共)



鳥獣輸入

全国動物園水族館御用達



- ・医学実験用動物
- ・愛玩犬、猫直輸入
- ・宣伝用、テレビ用、貸動物
- ・教材用鳥獣剥製販売
- ・原色世界雑類図鑑(34種1枚もの)要郵便券150円・鳥獣価格表100円

有限会社 吉川商会

本社 神戸市生田区中山手通三丁目二八番地 電話(078)221-8195・221-1517

飼育場 神戸市葺合区神仙寺通三丁目一番地 電話(078)241-3494



自然の
おいしさ

全糖

- 合成甘味料・合成保存料・合成糊料・合成着色料はいっさい含まれていません。



雪印ヨーグル

各130cc.=90円

パイン・オレンジ・ストロベリー・フルーツカクテル

編集委員 橋本 一郎・土井 良彦・樽本 勲・中川 哲男・宮下 実・長瀬建二郎・柳原 安昭・森本 泰利・大野 尊信
渡谷 文彦・農本 武志・野口 秀高・仲谷 登・高橋 真三・板野 健一・石島 宏胤・柴田 総